

蘇民将来説話再考

山口 建治

はじめに

二〇一三年の第三七回日本口承文芸学会大会で、筆者は「武塔神とは何だったか」という題で報告した。それは要約すると、オニの語源は「瘟」の字音から来ており、「饑」にオニヤライ（遣瘟）の訓があるのは、中国古代の「瘟神」祭祀が日本列島に伝わったからだとの自説に基づき、日本の疫神である武塔神や牛頭天王の原形は、中国民間で信仰された「鬼」を管理する「五道神」であり、「五道」の音 *ndau* が訛って、ムタフ（武塔）やゴトウ（五頭）・ゴズ（牛頭）となったと主張する内容であった。その報告をもとに『口承文芸研究』第37号に「武塔神とは何だったか―五道神から武塔神・五頭天王・牛頭天王へ―」（以下、前論文と略称する）を発表した。¹⁾

ところがじつは、『日本書紀』神代の一書（第四）にある、スサノオが高天原から追放され最初に降り立ったのは新羅のソシモリ（曾戸茂梨）というところであるとの記述をよりどころに、こ

のソシモリこそ「牛頭」の朝鮮語による訓読みであり、牛頭天王は新羅の牛頭山という地名に由来する（以下、曾戸茂梨≡牛頭説と略称する）という説があった。西田長男によれば、この説は「明治の諸学者にしてこれに言及しないものとてもない」ほど有力なものであったが、「それは明治という、我が国の勢力が韓半島にまで及んだ時代の人心に歓迎せられた一つの観念の如きものであって、どこまで確実な根拠があるのか、わたしには甚だ疑わしく思われる」というものだった。²⁾ また、岩波文庫版坂本太郎等校注の『日本書紀』の曾戸茂梨の注に、この語は朝鮮語で王都を意味する、徐耶伐・徐羅伐・徐伐をさすとする「近代の言語学者」の説が紹介されていた。こうした諸家の説が念頭にあったため、前論文ではこの曾戸茂梨≡牛頭説についてはあえて触れなかった。

牛頭天王がどのように形成されたかを明らかにするには、この神の前身ともいえる武塔神が登場する初期文献である『積日本紀』所載の備後風土記の蘇民将来説話をあらためてよく検討し直すことが不可欠である。この説話に関しては、これまでお

おくの研究があるが、なお未解決の謎も少なくないし、曾尸茂梨⁵牛頭説の影響もなお根強く残っている。

蘇民将来説話は従来「大歳の客」型の説話として研究されてきたようである。中国説話と比較した伊藤清司の研究ももっぱらこの話型と比較したものであった。⁽⁴⁾しかしこの説話は兄弟葛藤譚とも見なせるし、この方面から説話の謎に迫れないかと考え、中国説話の兄弟葛藤譚と比較してみたところ、中国の兄弟葛藤譚の典型とされる、九世紀初頭の『西陽雜俎』に載る「旁世説話」が、この説話の形成に与っているのではと考えるようになった。小論では、古代日本に大陸の瘟神信仰が伝来したという筆者独自の観点から、「旁世説話」と蘇民将来説話とを比較しつつ考察すると、これまで謎とされてきた蘇民将来説話の問題が解き明かせるだけでなく、曾尸茂梨⁵牛頭説が根強く残る理由も暗示され、結果として、旁世説話は蘇民将来説話を形成した基盤的な説話（原話）であると見なしうることを述べてみたい。

一 武塔神の原形は五道神

まず、武塔神（牛頭天王の前身）が中国の民間神「五道神」に由来するということを、あらためて確認しておく。敦煌駆雛文 S2055V⁵と『簠簋内伝』「牛頭天王序」の両文を見比べると、「鬼」を捉えるのが専門である鍾馗を媒介にして、中国の五道神が日本の牛頭天王になっていることが容易に理解出来る。なお敦煌駆雛文中の「五道將軍」は五道神と同じ神格である。

敦煌駆雛文 S2055V⁽⁵⁾

……[五道將軍]親至、虎（歩⁶部）領十萬熊羆。衣（又）領銅頭鐵額、魂（渾）身總着豹皮。教使朱砂染赤、咸稱我是鍾馗。捉取浮遊浪鬼、積郡（緝拿）掃出三峽。（五道將軍みずからお出まし、十万の勇士を率いる。銅頭鉄額の兵を率い、全身豹の皮を着る。（顔を）朱砂で赤く染め口々にさけぶ、われらは鍾馗だぞ、浮浪遊鬼を捉まえ逮捕して三危（敦煌の旧名）からはき出すぞと。）

『簠簋内伝』「牛頭天王序」⁽⁶⁾

「時に、北天竺摩訶陀国、靈鷲山の牛虎、波尸城の西に、吉祥天の源、王舎城の大王を名づけて、商貴帝と号す。曾、帝釈天に仕へ、善現に居す。三界に遊戯す。諸星の探題を蒙り、名づけて天形星と号す。信敬の志深きに依りて、今、娑婆世界に下生して、改めて牛頭天王と号す。」

古代の中国では、疫病は「鬼」によつてもたらされると考え、「疫鬼」の觀念が生じそれを祓う儀礼「傺」が行われた。五道神はほんらい「鬼」を差配管理するのが役目であり、「鬼王」でもあったので、駆雛文に見えるように疫神の鍾馗と同一化されるのである。

なお中国の「鬼」と日本のオニは、その姿形がかなり違う。中国の「鬼」は、人を一回り小さくした形、日本のオニは人の姿形からは遠く離れ、人より大きく強そうな化け物である。「鬼」とオニのイメージが日中間でかなり違うということは、相互の民間



図1



図2

文化を誤りなく理解するためには、つねに念頭においておく必要がある。図1は唐・呉道子の画と伝えられる「鍾馗抉目図」の鍾馗と疫鬼、図2は『政事要略』の追儼の項に載る方相氏と疫鬼の図である。⁸⁾

二 旁龟説話の先行研究

「旁龟説話」の内容は以下のようなものである。

「新羅の国に金哥という貴族がいるが、その遠祖は旁龟という名であった。弟の旁龟は裕福だが兄の旁龟は貧しかった。兄は弟から蚕の種と穀物の種を借りるが、意地悪な弟は種を蒸して与えた。一匹だけ孵った蚕は牛のような大きな蚕に育った。弟が羨んでその蚕を殺すと、おおくの蚕が四方から兄の家に飛んできて、繭がたくさんとれた。殺された蚕は蚕の王様「巨蚕」

で、(巾間に) たくさん蚕が集まったのだった。鳥が穂をまた穀物の種は一本だけ生え大きな穂がでた。鳥が穂をくわえて行くのを旁龟が追っていくと、鬼が錐(槌か)で岩に穴をあけ欲しいものを取り出し、飲み食いするのを目撃する。兄はその錐を持ち帰り、欲しい物を出して大富豪になった。弟が兄のまねをして、鳥の跡をついて行くと、鬼が出てきて錐を盗んだ兄と間違われて、鼻を長く引き延ばされて帰って来る。弟は恥じて死んだ。⁹⁾

中国側の先行研究から見ると、まず丁乃通「中国民間故事類型索引」では、六一三A「不忠な兄弟(友)」と何でも叶える宝物」の話型に分類して、この説話の内容を、I「蚕王」、II「独穂」、III「有求必応的寶貝」、IV「悪人遭難」の四要素で構成されるとし、八十例ほどの類話を挙げる。しかしその大多数はII以下の後半部のみで構成され、Iの「蚕王」を含むのは十例にすぎない。¹⁰⁾

顧希佳の「中韓旁龟故事比較研究」ではつぎのように述べる。この説話は、前半の「龍蚕」型(丁乃通のいう「蚕王」と後半の「盗み聞き」)型或は「両老友」「両兄弟」型、或は「長鼻子」型で構成される複合説話であるとし、中国、朝鮮ともに、現在にまで伝わる話は、いずれも前半部か後半部のどちらかが独立した話として伝わる。朝鮮半島には「龍蚕」型の話が伝わらないのに対し、中国には丁乃通のII、III、IVを欠いた「龍蚕」型が、養蚕地帯に二〇例ほど残されている。この「龍蚕」型部分は真正正銘の中国説話であったが、中韓交流のなかで韓国の話になり、ある

とき後半部の「盗み聞き」型と複合し、今日伝わる旁鉈説話になったのかも知れない。Ⅱ、Ⅲ、Ⅳのモチーフの連鎖は非常に強い生命力があり、いつでも変異を生み出せる説話の原型であり、「龍蚕」型はそれらのモチーフの基礎の上に育まれたものであって、語りのかたちがより特殊になっただけではなかるうか。つまり、旁鉈故事の原型は、その全タイプ構造としてはⅡⅢⅣだけであり、Ⅰの「龍蚕」型は前者の派生物であり、語り手によって付加されて前半部に置かれたのだと考えられる¹⁾。

日本の研究では、柳田国男がつと日本の昔話との類似に注目していた。その昔話とは、佐久間惇二編『全国昔話資料集成二』「北蒲原昔話集 新潟」八二「兄弟の話」である²⁾。はなしの概要は以下のようなもの。なお、()内は、二度目の調査に際し、話者が後から想い出したとして補った部分である。「龍蚕」部分は後補であろうとの顧希佳の指摘をそのままで行くような調査報告である。

村に二人の兄弟がいた。兄は心立てがよいが貧乏、弟は強欲で金持ちであった。(兄は蚕の種を弟に貰いに行くと、蚕の種を煮立てて与える。それを知らずに兄は蚕をかへしたら、一匹だけ生きた。わらだ一枚の大きさになった。弟が見に行くと、小牛くらいの蚕がいたので、斬殺した。そして、蚕があちこちから来て、うち中、蚕だらけになるが、村の衆がきてみんな持って行って、弟には何もなくなつた。) 兄は弟に種籾を借りるが、弟は籾を蒸かして兄に与え

る。兄が蒔くと一本だけ生えて、一本の杉のような稲になった。穂が出ると、鳥が穂を食いつまんで飛んでいった。兄が山の中まで鳥を追いかけると、鳥が岩の隙間に入るので隠れて番をしていた。夜になって着飾った子や若衆が出てきて踊り出した。槌を振ってはご馳走を出して飲み食いし、いなくなる。兄は、その槌を持ち帰り金持ちになる。弟がそれを真似ると、青鬼赤鬼に槌を持ち帰った兄と間違われ、さんざんいじめられて還り、癩病病みになったと。

この昔話の柳田注(二)に「コノ話ハ唐代ノ西陽雜俎ニモ出て居ル 珍重スヘキモノ 日本ニハコレホト似タモノマタ見ツカラズ。コレハ「西陽雜俎」ノモトノ形ニ近イモノ。珍重スベシ、赤谷ニアツタルハオモシロシ 是非ノコシオク 陸前ノ昔話、氣仙百疋塚」とある。柳田が非常に注目していたことが分かる。

なお、この昔話とほぼ同じ話が、鈴木棠三編『全国昔話資料集成二十』「武蔵川越昔話集 埼玉」十九、八石山の二として採録されており³⁾、結末部が少し異なり、弟は天狗に鼻を長く延ばされ家を出られぬようになったと、旁鉈説話の結末に近い形で残っている。この昔話集のあとがき(「川越地方昔話集」成立の背景)に、「川越地方の昔話の中に、越後の昔話が数多く含まれていた。川越地方には越後の人々の移住が多かったのである」とあり、この話が新潟から伝わったものであることを示唆している。

斧原孝守は、蒙古の『シディキュル』第十四話「欲深な弟」型の昔話(兄は貧乏で弟は豊かで欲張りである。弟に意地悪を

されて兄は苦況に陥るが、呪宝を手に入れ裕福になる。弟がそれを真似て失敗する。)を「魔法の金の槌」型と命名し、東アジアでの類話の分布状況を詳しく調べ、東アジアにおいては民族をこえて、この話型が広く伝播し、かなり好まれた話の一つであったことはほぼ間違いないだろうと指摘する。そして、日本の類話である埼玉の「犬頭系」(上記の八石山のことか)と新潟の話が、あまりにも旁桓説話と酷似していることから、比較的最近に書物から翻案されたものかと述べている。¹⁴⁾

斧原孝守、顧希佳達らの研究に基づくと、旁桓説話は、東アジアに古くから広く分布する影響力の強い話型の説話ということになる。

三 蘇民将来説話の謎の解明

以下、引用する蘇民将来説話のテキストは岩波古典文学大系二の『風土記』に拠ることにする。¹⁵⁾

これまでこの説話の謎とされてきたことを列記すると、蘇民将来とか巨旦将来という人名は何を意味するか、将来とは人名の一部かそれとも未来という意味の普通名詞か、「女子孫其家爾在哉」「己女子與斯婦侍」(とくに傍線部)はどう解釈すべきか、それと関係して武塔神に殺されるのは誰か、武塔神が「吾者速須佐雄能神」と名乗るのは何故か(曾戸茂梨は「牛頭」の朝鮮語訓みであり、武塔神・牛頭天王が牛頭山の信仰に由来するかか)などである。なお、ソミンとかコタンなどの説話の登場

人物名の意味を問題にすること自体、無意味ではないかという考えもある。しかし、八世紀末から蘇民将来符は連綿と製作されてきており、この説話が早くから疫病除けの信仰に結びついていたのは明白であって、その人名に特別の意味合いがこめられる伝説的な要素がなければ、これほどまで永年にわたる信仰を保持できないであろうと考える。また「将来」が何を意味するかは不明であり後考に待ちたい。

(1) 蘇民とは何か

これはすでに金沢庄三郎が解決済みであり、その著『日鮮同祖論』で指摘していた問題だった。先述した、岩波文庫版『日本書紀』の曾戸茂梨についての注の「近代の言語学者」のなかに、おそらく金沢庄三郎が含まれている。後述するように金沢の研究業績は、戦後ほとんど無視されてきたために、蘇民の意味が今日なお不明ということになっていただけだった。その金沢のいうところの要点を列記する。

「蘇之保留の之は助辞で、これを除いた蘇保留は朝鮮史に所謂徐伐で、新羅国又は新羅国都のことである(六九頁)。

「園韓神は曾韓神であって、このソが熊襲のソか新羅のシであるかは更に研究を要する別個の問題であるが、園が地名ソと助辞ソとの連なつたものであることは疑いを容れぬ所である。」(二八三頁)。

「苑県・苑臣・苑人などがある。……これ等の苑はこれを園の義に採らず、地名又種族名のソに助辞ソの加わつたものと解することが出来る……。」(一八五頁)

「新羅の金氏もこれをソと訓読したものと思はれるのであるが、漢書王莽伝に高句麗侯騶（す）と見え、……百済国の大姓八族……沙（さ）氏のあるを以て考へると、新羅・百済・高麗いづれもソまたは其類音を姓とする種族であった」（一九九頁）

「姓氏録、韓矢田部造の条に、……率^{からソノおみら}韓蘇使主等」参来……とある蘇も亦彼の姓氏なるべし」（一九九頁）。

「曾尸茂梨が新羅の首都即ち今日の慶尚道慶州の地であることは、前章にも述べたとおりで、曾尸茂梨の尸は助辞、茂梨は村の義であるから曾尸茂梨は曾村といふことになる。」「曾尸茂梨の尸を除けるソモリは、徐伐即ソホリと音韻上一致するもので、モとホ即ちmp音の音通である。……このソホリという国号は実は新羅のみではなく、任那・百濟・高麗・扶

余の諸国に通じて用ひられた大名である」（二二二頁）

また曾尸茂梨＝牛頭説そのものについても、「一説には、牛頭天王の名は曾尸茂梨の訳語牛頭から出て、もと楽浪地方の山名であるとする。また星野博士は……これは新羅の牛頭方即ち今の江原春川府であらうといはれてゐる。しかしながら以上の諸説いづれも謬りであつて、曾尸茂梨は新羅の都即ち今の慶尚道慶州の地に相当するものである」（六六頁）と、金沢は明言している。曾尸茂梨のシ（尸）はノに相当する助辞でこれを除いた、ソモリ、ソホリは、ソ村の意であり、ソ（蘇）は朝鮮の種族名であることは、八十年以上も前に金沢庄三郎がすでに指摘

していたのである。近くは川村濤も金沢のこの説を引用し、「曾（蘇）の村」に住む人々が『曾（蘇）の民』と呼ばれることは必然であり、『蘇民』とはまさに、スサノオがいたと伝えられている『曾（蘇）の村』に存在していたのである」と述べている。¹⁸⁾

金沢の研究に基づけば、蘇民が新羅など朝鮮半島から渡ってきた民の意であつたことは明かであつて、もはや何も付け加える必要はないであろう。岩波文庫『日本書紀』曾尸茂梨の注にも、先に引用した部分のあとに続けて「この解釈に従えば、曾尸茂梨は語源的には新羅と同語となる」と明言している。ただ、蘇民将来説話の研究にはなぜか金沢のこうした研究成果は生かされず、ほとんど無視されてきた。

(2) コタンとは何か

備後風土記の蘇民将来説話には、蘇民将来の弟の名は出ないが、ほかの縁起類などのテキストには、弟の名はすべてコタンとなつており、その表記はさまざまだが、コを表すのに巨という字を用いることが圧倒的におおい。コ音を表すだけなら字はいくらもある。なぜあえて巨を用いるのか。以下に種々のテキストの用字を示す。

巨旦（将来） 『二十二社註式』¹⁹⁾

巨端／巨丹（将来） 『神道集』『祇園大明神事』²⁰⁾

巨旦（大王） 『竈篋内伝』²¹⁾

巨单（将来） 『灌頂祭文』（宮地直一氏蔵）²²⁾

巨旦／巨单（将来） 『牛頭天王之祭文』（神宮文庫蔵）²³⁾

巨丹／巨達

『牛頭天王縁起』（神宮文庫蔵）⁽²⁴⁾

古端（長者）

『牛頭天王縁起』（吉田家旧蔵）⁽²⁵⁾

古単（長者）

『牛頭天王縁起』（西田長男氏蔵）⁽²⁶⁾

古端（将来）

『牛頭天王御縁起』（東北大狩野文庫蔵）⁽²⁷⁾

小旦（長者）

信濃国分寺『牛頭天王之祭文』⁽²⁸⁾

旁匱説話は少なくとも九世紀にはすでに新羅で流布していた話である。この話とそっくりな昔話が日本に残っているから、朝鮮半島から日本へ渡ってきた人々にもなって日本に伝わったであろうことは容易に想像がつく。蘇民将来説話のコタンが何を意味するかは、旁匱説話を下敷きにして考えれば、以下のように推測できる。

旁匱説話で、貧しい兄が金持ちの弟から蒸した蚕種をもらって孵すと、一つだけ巨大な蚕に育った。それを原文では「巨蚕」といっているが、丁乃通が「蚕王」と言い換え、顧希佳が「龍蚕」と言い換えている。中国人の二人がわざわざ言い換えるくらいだから、「巨蚕」は他の漢籍にもあまり用例がない、朝鮮特有の語であったかもしれない。新羅に旁匱説話が流布し、半島からの移民の流入にもなつてこの話が日本列島にも伝わったと想定し、そのような環境のもとで蘇民将来説話が形成されたと考えると、富裕な弟の名コタンの由来はこの「巨蚕」の字音から出たことではなからうか。

中国語の「巨蚕」の現代音は *guy san* であるが、中古音では *giotznm* となり、「巨蚕」の日本語の漢字音では漢音で「キヨ

サン」、呉音では「ゴサン」である。中国語の「巨蚕」の中古音の *giotznm* と日本の呉音読み「ゴサン」は非常に近似した音になる。その「ゴサン」が、昔の人にはコタンとも聞こえたということであろう。一般の国語辞典でも、サ音は古くは *so* であったというから、たしかに今よりよほどタに近い音であった。

蘇民将来説話のコタンのコに「巨」字が頻用されること、「巨蚕」漢字音を日中のそれぞれの古代音で発音すると近似した音になること、さらには蚕の正字である「蠶」が画数のおお書き難いむずかしい字であったこと、などを総合して考え合わせると、「巨蚕」がコタンの原形ではなかったかと考えられるのである。つまり、コタンとは「巨蚕」であり、養蚕で財をなした「蚕王」の意味だったと推測できる。

このような推測があながち見当外れではないことは、上田市信濃国分寺の檀信徒が製作する蘇民将来符には、「蠶大當」と墨書されるものがあり（図3）⁽³⁰⁾、その傍証となり得るであろう。養蚕業と蘇民将来信仰の関連の深さを示すものとして興味深い。

(3) 殺されたのは誰か

南海からの帰路、武塔神が報復のために殺したのは誰かということについて、さまざまな解釈がある。代表的な例を示すと左記のようになる。



図3

『国史大辞典』 巨旦（弟の将来）一族⁽³¹⁾

水野祐 蘇民将来一家の者以外（弟の将来一家など）⁽³²⁾

関和彦 蘇民将来とその妻⁽³³⁾

影山尚之

関説と同じ（蘇民将来またその婦はみな疫死した）⁽³⁴⁾

瀧音能之

蘇民将来の娘一人を除くすべての子孫たち（巨旦も殺されていない）⁽³⁵⁾

殺されたのは誰かの見解の分歧が生ずるのは、「我、将来に報答爲む。汝が子孫其の家にありや」と「己が女子と斯婦と侍ふ」の読みかたにかかわる。この問題を考える前に、武塔神の前身である五道神がどういう神であったかを想い出しておくことが重要である。中国の五道神は、亡者の「鬼」を管理する冥界の王であり、この世に現れ出て巡遊審判するという性格を備えていた。『太平廣記』巻一〇三の李丘一の話に、その片鱗がうかがわれる。旅先で突然死した李丘一は冥界に行き、槐樹の下に飼う葉桶があるのを見て、道中知り合った男に、「五道大神が世間の罪福を巡察するたび、ここで馬を休めるのだ」と告げられ、はじめて自分が死んでいたのに気づくとある。⁽³⁶⁾

武塔神が五道神の性格を引き継ぎ、現世の人の罪福を巡察するという、まるで裁判官のような任務をおびていたと考えると、「将来に報答爲む」というのは弟のコタン「将来に報復しよう」との意味であり、「汝が子孫其の家にありや」というのは、コタン将来の家にお前の子孫はいるのかという問いになる。そして、

それとたいして蘇民将来は、「己が女子は斯の婦（つまりコタン将来の妻）」とともに（コタン将来に）侍う」と答えたのだと解することができる。後世の祭文や縁起類でも、コタンに嫁いだ蘇民将来の娘を除きコタン一族は皆殺しにされるのであり、物語のあらすじには根本的な変化は起きていなかったのである。

例えば信濃国分寺牛頭天王之祭文では、「小旦長者ガ娘ハ自ガムスメニテ候、小旦長者ヲバ謂シ給ウ共我等ガムスメヲバ御除給エト申し奉レバ……」⁽³⁷⁾とあり、『神道集』「祇園大明神事」では、「蘇民将来大嘆、自一人娘彼家婦成、名端嚴女、……、蘇民将来之子孫云文字書付、汝娘肩付、其驗不滅亡、……一日一夜間、一百餘人滅亡畢、其中蘇民将来娘一人、其難遁父宿所返。」とある。⁽³⁸⁾蘇民将来の娘はたしかに叔父のコタン将来に嫁いでいたのである。

今日の觀念からするとそれは異様な婚姻だが、新羅の骨品制という身分制度では、むしろ当然であったようだ。今村与志雄は、『西陽雜俎』原文の「第一貴族」に注して、「この表現は、新羅における身分制、骨品制を反映しているらしい。『新書』二二〇によると、『新羅……その族は、第一骨、第二骨と名づけて自ら区別されている。兄弟の女、姑、姨、従姉妹みな、聘して妻にする。王族が第一骨である。妻もその族である。生れた子はみな第一骨になる。第二骨の女を娶らない。娶ったとしてもつねに妾媵である」と指摘している。⁽³⁹⁾蘇民将来の娘が叔父と結婚するのは、新羅の特殊な身分制度の反映と見ることができよう。ともあれ善業には善報、悪業に悪報というのが、こうし

た民間説話のきまりごとであり、そこから逸脱すると民間伝承としての生命力は大きく損なわれよう。

(4) スサノオ登場の理由

武塔神・牛頭天王の原形が五道神であるという自説に基づけば、武塔神・牛頭天王すなわち五道神とスサノオの最大の共通点は、いずれも冥界王あるいは根の国の王であり、のちに疫鬼を祓う疫神になったという点である。疫神は中国南部では瘟神ともいうが、非業死した武将の霊がしばしばその役を担われ、五瘟神とも五帝とも称された⁴⁰。日本にもそうした瘟神祭祀が伝わって、高天原から追放され根の国にいったスサノオが、非業死した英雄として人々の記憶から呼びもどされ、疫神（瘟神）の列に加えられ、早くから祀られるようになっていたのであろう。

蘇民将来説話にスサノオが登場するのは、裕福なコタン将来に冷遇される武塔神（牛頭天王）の姿に、高天原から追放され根の国にいったスサノオの姿を重ねて、その境遇に同情を寄せ新羅系渡来人によつて語り伝えられてきたからではなかつたか。後になるとそのことを公言するのが憚れるようになって、スサノオの名を隠すようになった。信濃国分寺の『牛頭天王之祭文』に「昔シ武蒼天神之本誓ヲ伝え請ひ給ハルニ、是レ自リ二十万恒河沙ヲ去リテ、須弥山ヨリ北ニ、ケイロ界ト云ウ処有リ、並ニ白キノ御門ト申す。其御子、今之牛頭天王未ダキサキノ宮定リ給ハズ。……」とあるところからもそのことは推測できる⁴¹。この祭文でいう「白キノ御門」がスサノオを指すことは

いうまでもないであろう。ここでは牛頭天王は「白キノ御門」の子供になっているが、要するに民間では早くから牛頭天王とスサノオは同一視されていたのである。

養蚕と秦氏の関係は深く、養蚕業を取り仕切っていたのは渡来氏族の秦氏であつたといわれている⁴²。『日本書紀』によれば皇極三（六四四）年、蚕に似た虫を拝む常世神信仰を秦河勝が取り締まる事件が起こっている。新しい優良品種の蚕種が外部からもたらされたことにより、渡来氏族同士の間で起きた紛争と考えられる⁴³。養蚕をめぐって人々の間で引きおこされる葛藤という点で、この事件は『西陽雜俎』の旁包説話の「蚕王」の話に通ずるところがある。こういう現実的な基盤があつたからこそ、「白キノ御門」であるスサノオが蘇民将来説話に登場するのである。

むすびー曾戸茂梨Ⅱ「牛頭」ではないー

最後に、もう一度金沢庄三郎『日鮮同祖論』から引用しておこう。

ただ私の甚だ不思議に思ふことは、従来の学者がこの素盞鳴尊新羅曾戸茂梨に天降の事を直接高天原からではなく、一先ずこの大八洲国にお降りになって、それから新羅にお渡りになったものだ、極力主張することである。（六九頁）

先述したように西田長男は、曾戸茂梨Ⅱ牛頭説について甚だ疑わしいとしながら、明確にこの説を否定している金沢庄三郎については一切ふれていない。スサノオは新羅から渡つて来た

神だとする考えはやはり肯んじられなかったからであろうか。金沢庄三郎は今に至るも、「日鮮同祖」論を主唱し朝鮮の植民地化を正当化した御用学者と目される。石川遼子はその著『金沢庄三郎』で、戦後の学界での金沢評価は、「金沢の著作からではなく、むしろ新聞・雑誌に現れた時局的用語としての『日鮮同祖』から敷衍された同祖論批判であった」と述べ、学問的な吟味を欠いた政治的なものだったと指摘している。⁽⁴⁾

小論の結論をまとめる。蘇民将来説話を旁苞説話と比較参照して検討すると、蘇民将来の蘇民は新羅など朝鮮からの渡来民であり、巨旦・古端などのコタンは本来「巨蚕」と表記すべき養蚕で財をなした「蚕王」の意だった。武塔神が殺したのは、コタン将来に嫁いだ蘇民将来の娘一人を除いた、コタン一家のすべての人である。蘇民将来の娘が叔父に嫁ぐのは新羅の骨品制という特異な身分制度によるのであろう。この説話で疫神武塔神（「五道神」の列島版）が自らササノオを名乗るのは、非業死した敗軍死将を祭神として祀る中国の瘟神祭祀が日本に伝わり、それになぞらえて、高天原から追放されて根の国（冥界）にいったササノオが、渡来系の人々の記憶から呼びもどされ、疫鬼を祓う「瘟神」と見なされ（「瘟神」になるよう期待され）たからである。曾戸茂梨¹¹「牛頭」だからではない。

以上のように、古代日本に瘟神信仰が伝来したという独自の観点に立って、旁苞説話を下敷きにして蘇民将来説話を再検討すると、これまで謎とされてきたこの説話のいくつかの問題点

を解き明かすことができた。よって新羅の兄弟葛藤譚である旁苞説話は蘇民将来説話形成に与った原話と見なしてよいのではないかというのである。

注

- (1) 拙論「武塔神とは何だったか」「口承文芸研究」三七号（勁草書房「オニ考—コトバでたどる民間信仰—」所収）。
- (2) 西田長男「祇園牛頭天王縁起の成立」「神社の歴史的研究」塙書房。
- (3) 坂本太郎等校注『日本書紀』（一）岩波文庫。
- (4) 伊藤清司「昔話伝説の系譜」第一書房。
- (5) 黄徴・呉偉編校『敦煌願文集』岳麓書社。
- (6) 深澤徹編『篋篋内伝金玉兎集（抄）』現代思潮社。
- (7) 唐・呉道子（伝）「鍾馗抉目図」「中国歴代名画点読 百魑図説」上海画報出版社。
- (8) 「政事要略」卷二八「年中行事十二月下」、吉川弘文館『新訂増補国史大系二八』所収。
- (9) 段成式撰、許逸民校箋『酉陽雜俎校箋』続集卷一「支諾臯上」中華書局。
- (10) 丁乃通『中国民間故事類型索引』中国民間文芸出版社。
- (11) 顧希佳「中韓旁苞故事比較研究」「杭州師範學院學報」二〇〇四年第四期。
- (12) 佐久間惇一編『全国昔話資料集成二』北蒲原昔話集 新潟「八二」兄弟の話。
- (13) 鈴木棠三編『全国昔話資料集成二〇』武蔵川越昔話集

埼玉〕十九 八石山の二。

- (14) 斧原孝守「魔法の金の槌」『比較民俗学会報』三十四号、三十九号。

- (15) 日本古典文学大系2「風土記 逸文」〔備後国 蘇民将来〕岩波書店。

- (16) 川向富貴子「蘇民将来符に関する基礎資料Ⅰ」『都市民俗研究』第八号、同Ⅱ「伝承文化研究」第二号。

- (17) 金澤庄三郎「日鮮同祖論」汎東洋社。

- (18) 川村湊「牛頭天王と蘇民将来」作品社。

- (19) 「二十二社註式」「祇園社」、経済雑誌社「群書類従」巻第22所収。

- (20) 『神道集』東洋文庫本、講談社。

- (21) 注(2) 西田論文所引「篋篋内伝」。

- (22) 注(2) 西田論文所引「灌頂祭文」。

- (23) 注(2) 西田論文所引神宮文庫本「牛頭天王之祭文」。

- (24) 注(2) 西田論文所引神宮文庫本「牛頭天王縁起」。

- (25) 注(2) 西田論文所引吉田家旧蔵「牛頭天王縁起」。

- (26) 注(2) 西田論文所引架蔵「牛頭天王縁起」。

- (27) 東北大図書館狩野文庫蔵「牛頭天王御縁起」、松本隆信「中世における本地物の研究」所引。

- (28) 上田市デジタルアーカイブポータルサイト、文明十二年書写「牛頭天王之祭文」<http://museum.umtc.jp/somin/sominshou/sominshou02.html>

- (29) 漢字の中古音表記は郭錫良著『漢字古音手冊』北京大學出版社による。

- (30) 注(28)の上田市デジタルアーカイブポータルサイト、

「蘇民将来符」。

- (31) 三橋健「蘇民将来」『国史大辞典・八』吉川弘文館。

- (32) 水野祐「入門・古風土記(下)」雄山閣。

- (33) 関和彦「風土記」社会の諸様相―その5―蘇民将来考―『風土記研究』十巻。

- (34) 影山尚之「59蘇民将来」上代文献を読む会編『風土記逸文 注釈』翰林書房。

- (35) 瀧音能之「蘇民将来伝承の再検討」『古代文化研究』二巻。

- (36) 『太平廣記』巻一〇三報応二の李丘一

唐李丘一、好鷹狗毘獵、万歳通天元年、任揚州高郵丞、忽一旦暴死、見兩人來追、一人自云姓段、時同被追者百余人、男皆著枷、女即反縛、丘一被鎖前驅、行可十余里、見大槐樹數十、下有馬槽、段云「五道大神每巡察人間罪福、于此歇馬」丘一方知身死。

- (37) 注(28)の上田市デジタルアーカイブポータルサイト、文明十二年書写「牛頭天王之祭文」。

- (38) 注(20)『神道集』祇園大明神事。

- (39) 今村与志雄訳注『酉陽雜俎』、平凡社東洋文庫四十。

- (40) 拙著「オニ考」勁草書房発売・辺境社発行。

- (41) 注(28)のサイトの文明十二年書写「牛頭天王之祭文」による。

- (42) 布目順郎「養蚕の起源と古代絹」雄山閣。

- (43) 直木孝次郎「日本の歴史二―古代国家の成立―」中央公論社。

- (44) 石川遼子「金沢庄三郎」ミネルヴァ書房。
(やまぐち・けんじ)神奈川大学